

第三百二十回 青葉会

平成二十四年十一月二十二日(木) 午後六時〜九時

丸紅来客食堂「談話室」

〈選者〉 ☆ 川合万里子 先生

〈出席者〉 石川清 今井紀久男 小川恭延 柿崎忠彦 豊田ゆたか 中野一灯 中山芳博 福島正明

山崎亜也 山内天牛

〈投句〉 伊賀山そらお 大林猛 久米五郎太 小西弘子 朱牟田恵洲 土谷堂哉 古田昇 宮内規雄

南平和夫 渡邊盛雄

〈紙上選句〉 赤田堅 小早健介 庄司龍平 高橋敏郎 橋口隆 早川允章 村田くに子 山崎青史

山本三恵

ゴシックは撰者の天

《選者吟》

胎動を抱き秘湯へ初時雨

万里子 (紀・龍・正・三)

短日や個人といふは絶滅種

全 (忠・龍・三)

ハロウイン仮装を凝らす少女たち

全

飛石に毛繕ふ猫小六月

全

立冬やとつぷり暮れて夕刊来

全

《互選句》

十一點 大根を包んで届く陸奥新報

忠彦 (堅・清・健・敏・ゆ・灯・正
く・亜・天・三)

六點 ☆ 夕映えに立つ妻の背やすき原

ゆたか (万・清・健・隆・允・青)

(青：嘘でもいいから「妻の背」を「妻の亡霊」とすると不気味な面白さが出る)

五點 奥琵琶の日暮れむらさき鴨来る

堂哉 (堅・龍・ゆ・允・青)

(青：きれいな景色。中七は少し無理↓「むらさきに暮れ」では?)

四點 木枯しや饅頭をすする無宿人

紀久男 (健・敏・正・三)

小春かな工事現場のラジオ寄席

五郎太 (健・灯・隆・く)

(隆：上五↓「小春日や」がいいと思う)

三點 ☆ 塔暮れて恋ひ鳴く鹿の声細る

一灯 (万・恭・ゆ・三)

(☆：暮れて↓暮るる。細る↓細り)

二點 飛ぶ鯔のしぶき夕日を散らしけり

全 (紀・恭・芳・亜)

☆ 黒潮を見下ろす丘に帰り花

昇 (万・清・芳・允)

☆ 鱸酒に酔ふてひととき不老かな

盛雄 (堅・敏・ゆ・青)

冬の日の石に羽伏せる冬の蝶

弘子 (紀・芳・正)

(冬が重なることについて賛否あり)

三點 ☆ 落葉焚けずなりて久しき町住まひ

恵洲 (万・恭・忠)

熟柿(じゅくし) 三つ朝飯前の甘(うま)きこと

ゆたか (堅・忠・亜)

(広島の西条柿)

二點 草食系男子蔓延(はびこ)る憂国忌

昇 (芳・灯・亜)

ゆつたりと小型機の飛ぶ小春かな

そらお (恭・く)

☆ 日向ぼこ一寝入りして古史を読む

清 (万・隆)

凍雲や島と見紛ふ貨物船

全 (恭・龍)

☆ 宴果てて一の酉へと流れゆく

紀久男 (万・允)

☆ 色鳥や原発岬に風車殖ゆ

全 (万・正)

暮れなずむ庭にほのかに花八つ手

恭延 (清・允)

冬雀群れ来て小庭活気づく

全 (忠・敏)

出雲から安産御守神の留守

忠彦 (芳・天)

京だしの淡き味わひ蕪汁

五郎太 (清・敏)

一点

紅葉の真只中へ着陸す
郵便の宛名字(あき)消えくずの花

☆引く波にさざれ石鳴る小春風

手応への無き人生に綿虫や

☆ 禁じ手を使ふと言ふ人冬ざれる

☆ 通院や市役所裏の稲稔り

病棟の灯ともし頃を蚯蚓鳴く

☆ 相合もビニール傘の時雨かな

暖房を入れるを憚る季のはざま

図書館へ往き来する間の紅葉狩

茶の花や大手術して丸一年

目を閉ぢて足で落葉の厚さ知る

足の湯に浸り眺むる冬の海

伊豆の峰風車廻して夕時雨

厚着して逆縁二代の叔母見舞ふ

ライトアツプ渚の紅葉いよよ燃ゆ

冬日射し鉄塔銀の一色に

日の光のみ透しをり白障子

山茶花や街の窪みの喫煙所

(青: 喫煙派はますます肩身が狭い)

到来の佳き酒ありて冬ぬくし

山粧ふ旅の絵日記筆洗ふ

白菊の三輪香る空家かな

(青: 三輪の断定がいい)

☆ 野菊濃き径行きつきて古墳山

(☆: 中七↓径(こみち)行きつき)

浮世絵の皿のふぐ刺めくり酌む

(青: 「めくり」が抜群の表現。うまい！)

土手越へて坂東時雨迅く来たり

寒厨に酒酌み天地寛ぎぬ

伝説のでんぐり返し枇杷の花

治らない右肩下り冬薔薇

唯一人枯野の風に吹かれけり

缺礼の葉書若干冬に入る

i P S 細胞念入りに読む文化の日

栗羊かん笑顔老舗の若旦那

利休も愛でし

芥子(けし)餅は堺の銘菓秋の旅

湯豆腐や年寄に相応の風

弘子 (忠・く)

ゆたか (灯・天)

一灯 (万・ゆ)

芳博 (紀・敏)

正明 (隆・天)

和夫 (万・天)

規雄 (健・垂)

亜也 (万・ゆ)

全 (恭・健)

天牛 (灯・隆)

全 (紀・允)

そらお (正)

清 (堅)

全 (灯)

紀久男 (芳)

猛 (紀)

恭延 (垂)

全 (天)

弘子 (青)

恵洲 (忠)

堂哉 (龍)

ゆたか (青)

一灯 (万)

全 (青)

全 (青)

芳博 (く)

全 (紀)

正明 (堅)

全 (隆)

規雄 (堅)

亜也 (龍)

天牛 (隆)

全 (清)

全 (く)

盛雄 (三)

● 次回青葉会

十二月五日(水)

鈴木演芸場・昼の部見物(木戸銭・フ長ム正)

九段下・琥珀にて年忘れ句会(会費・ム長)

以上 文責 紀久男

平成二十四年十一月句会報

一 今回は先生以下11名出席。投句10名。亜也さんの進行役で順調に推移。御覧のように忠彦さんが断トツ。次いでゆたかさんでした。

久しぶり出席の芳博さんのブータン旅行の話や社友会總會のこと（規雄さんが四年ぶり参加されるも帰りが立ちん棒でお疲れ。会員諸兄の殆ど出席）などを話題にしつつ、冴えた正明さんの駄洒落連発に感心しながら盛り上りました。清さんが手に入れた地酒「助六」（川崎の酒店が商標登録した丹波の酒）四合瓶と生貯蔵酒の小壘5本。芳博さんの麦焼酎「百年の孤独」（宮崎）、そして先生お手製のチヂミ。伊丹の盛雄さんからの白ワインPlettberg Bretzenheimer Pastorei（黄金色で一吋甘口ですが旨い！）。弘子さんからのボジョレヌーヴオ Essence de fruit と寄贈多く吞兵衛句会の異名通りと相成った次第です。

二 関係者近詠

散骨の叶ひし海へ燈流す	万里子	戯（じ）れ合ひて落葉まみれの子と仔犬	允章
塩飴の味比べつつ八月尽	全	短日を嘆きつ妻は独楽鼠	全
秋刀魚焼く千円カットの髪軽く	眞希子	黄落に日の燦々と大通り	全
黒犬に真つ赤な首輪秋立ちぬ	全	卒寿の師古希が囲むや菊日和	恵洲
ふかし諸よその子うちの子寄つといで	全	採りて来し茸確かむ子の凶鑑	全
武蔵野の一本道や秋夕焼	弘子	大往生の遺影莞爾と菊の中	全
稲光姫の鬢にも白いもの	全	——「大鉄会」十一月	
枝豆の塩溶けのこる織部かな	全	秋日傘うしろ姿に思ひあり	河原四郎
良夜なり同じところで泣く映画	全	ドビツシーを偲ぶ仲間や宵の月	全
竹の春ビルの中庭充たしけり	恭延	秋茄子のこれが最後と手より掌に	大手明男
LEDランプ点して秋の暮	全	秋宵や艶笑好きな奴偲ぶ	全
新横綱千秋楽に生まれけり	全	長き夜の海静かなり安房の国	允章
数かぞへ小鴨の無事や野分後	忠彦	別れきて夜寒の橋を渡りけり	全
弟より鱧鱔受けぬ暑気続く	和夫	朝寒の空渡りゆく鳥の影	全
秋蟬や吾の鼻目掛け急降下	全	自分史に空白のあり虚栗	盛雄
酒すすむ妻の芋茎は母譲り	紀久男	霜夜読む鬼貫にもものふの貌	全
——「萬緑」十二月号——		足早に有無を言わせず冬来る	全
崩れ塀の陰におさまる秋明菊	盛雄	艶晰（つやはなし）続き聴きたし秋の宵	紀久男
——毎日新聞・兵庫文芸11月28日和田悟朗選		呆氣（あつけ）ない友の訃報や沈む秋	全
		新酒もて上京句座へ喜寿の友	全
		——「琥珀会」十一月	

三「俳句」10月号所載・高橋睦郎の作品合評について

「開けて猶時分の花や散りてなほ」：雀右衛門の追悼句に続く「櫻山ふぶく集めてさくら川」を浄瑠璃の一節を聴いているような美しい句。そして「櫻てふ十日の夢も失せにけり」を声に出してうたいたい句と中西夕紀は評している。「天神は雷霊（いかづち）水霊（みづち）大夕立」：天満祭を詠んだ句についてリズム感のある俳句と評している。問題は「八方の原子爐尊（たふと）四方拜」の解釈で中西夕紀は原子炉を生活にとって必要悪として肯定していると解釈。被災地に居住している高野ムツオは否定的な批判精神を込めたアイロニー、諧謔精神の表現と評釈している。皆さんは如何？

十二月十日

紀久男記